Argonauta 21:54-55 (2012)

大垣俊一さんの思い出

遊佐陽一

今に至るまで，頭の上がらない先輩が何人かいる。疑いなく大垣俊一さんはその一人である。大垣さんとは，時代は重なっていないものの，和歌山県白浜町にある京大瀬戸臨海実験所の先輩・後輩の間柄で，わたしが院生の時に，大垣さんが石垣島から和歌山県田辺市に戻られて以来，20 年ほどの付き合いであった。

わたしが院生の当時は，研究対象が同じ軟体動物ということもあり，いろいろ教えも乞うたが，研究の方向性が決定的に違っていたために，それほど深い研究上の付き合いはなかったというほうが正確であろう。当時，大垣さんは海洋潮間帯の動物群集を主な興味の対象とされ，動物の行動を見る場合でも行動生態学には批判的であったのに対し，わたしはアメフラシなどの雌雄同体性について行動生態学的なアプローチをとっていた。むしろ，海洋生態談話会アルゴノータでの研究発表や，塾（大垣さんが田辺に開かれて，わたしが雇われ講師としてお世話になった）でのお付き合いが多かった。むろん，その中でそれぞれの研究に対する話をすることはしばしばあり，なかでも，大垣さんから海洋動物の群集生態学や長期変動の重要性について教えていただくことが多かった。ただし，わたしは当時自分の研究を最優先とし，大垣さんが主催されていた調査に参加したことはほぼ皆無であった。それをとがめるわけでもなく，黙って許してくださったのは，ありがたかった（これに対する反省は後で出てくる）。

博士課程を終えて 2 年ほどして，わたしは職を得て熊本に行った。熊本に 8 年ほどいた間は，交流は賀状とごく時折のメイルのやりとりのみであったと思う。2003 年にわたしが奈良女子大に赴任し，アルゴノータの例会が奈良女で開かれることになってから，再び交流が盛んになった。年数回の例会に加え，会誌アルゴノータをはじめとするさまざまな雑誌に大垣さんが書かれる論文や総説などを，投稿前に見せていただくことが多くなった。群集生態学や統計などについて考え，調べ，ひやひやしながらも一応のお返事をする過程で，これらの分野に対する興味と知識が増え，自身の研究の幅を広げることにつながったのは疑いない。つまり，大垣さんはご自身の論文原稿を見せることで後進に対する教育をされ，わたしは 10 年以上にわたってじりじりと影響を受け続けたのである（長期変動とはこのようなことかも知れないと思ったりもする）。わたしが，まがりなりにも群集生態学を研究レパートリーに加えられたのは，大垣さんあってのことだと思う。

これほど長い間お付き合いいただいたにも関わらず，実はわたしには大垣さんとの共著の仕事がひとつもない。そんなわたしに，大垣さんは亡くなる際に，来年でちょうど 50

年目となる，ある長期研究の取りまとめにお誘い下さった。大垣さんの悲報に接し，手書きのメモを見せていただき，そのことを知った。ありがたいのと同時に，申し訳ない気持ちで一杯であった。ご本人が亡くなってからはじめて共著論文を書くのは，どうみても遅きに失している。その研究について大垣さんが書かれたしっかりとした論文の構想メモときちんと整理されたデータを前に，それでも途方にくれている自分がいる。今から思えば，若い頃に群集の調査に参加して，もっと大垣さんのやり方・考え方を学んでおけば良かったと，心から残念に思う。しかし今となっては，メモから大垣さんの考えをたどり，その研究を出版することが，大垣さんに対してできるわずかばかりの恩返しである。

大垣さんの研究全般を論じるにはもっとふさわしい人がいるので，わたしは控えようと思う。ただひとつ，研究には長く残るものとそうでないものとがある。本人が亡くなってからも生き続ける研究はあり，大垣さんのいくつかの研究は，明らかにそうである。うちの学生が海洋生物の研究をはじめる際に大垣さんの論文を読む機会が多いのは，そのことの証である。

（ゆさ　よういち・奈良女子大学理学部）